

Troilus and Cressida におけるリビドー経済（2）¹

八 鳥 吉 明

Troilus and Cressida においては性愛と戦争の対立から戦争へと向かうリビドー経済が顕著である。ギリシアの将軍 Achilles はこのプロセスに対してかなり逸脱的な対応や態度を展開するものの、彼の行動の軌跡は最終的にこのリビドー経済に回収される。しかしこの逸脱において Achilles の自己——「私」のあり方——にある際立った特徴が確認されるのも事実である。それはナルシズムである。本論は Achilles のナルシズムに焦点を当てながら、彼の逸脱的自己の状況を考察する試みである。また Achilles の逸脱は彼（の自己）とギリシア共同体の軋轢を引き起こさずにはいない。その観点から、Achilles の自己を相対化する他人の存在と共同体における価値の問題を論じ、さらには Achilles の性愛の問題が彼と共同体の間にもたらす性を巡る交渉を考察する。

Achilles において性愛と戦争が対立するということは彼のリビドーが「対象リビドー (object-libido)」としてトロイ王 Priam の娘 Polyxena に備給されたり、あるいは同性愛的なかたちで Patroclus や Hector に備給されたりしてもそれが戦争に向けられることはないということ、つまり彼のリビドーはギリシア共同体のために供されることはないということであり、そのことが彼とギリシア共同体の間に軋轢をもたらすのである。しかし問題はそれに止まらない。部分的に対象備給された Achilles のリビドーの残りの部分は自分自身に向けられる、つまり「自我リビドー (ego-libido)」として自分自身に備給されるのである。そこには自分がギリシアの軍事戦略上の最有力者であるという経験に裏打ちされた自己認識が当然働いている。Achilles のナルシズムはこうして形成される。

Achilles のナルシズム的自己を特徴づける要素とは、自己利益に繋がらない外的世界に対する無関心 (indifference)・全能感 (omnipotence)・誇大妄想

(megalomania) であり(cf. “On Narcissism” 66, 95), それらが彼とギリシアの将軍達とを対立させる彼の「慢心」“pride”の源泉となっている。一幕三場におけるギリシアの将軍達による軍事会議で, Ulysses は Achilles のこの存在様態にトロイ戦争の長期化を許すギリシア陣営内部の無秩序の原因を見出していた。

The great Achilles, whom opinion crowns
The sinew and the forehand of our host,
Having his ear full of his airy fame,
Grows dainty of his worth. . . . (1.3.142-45)

Ulysses によれば, Achilles は現在進行する外部の現実世界への関心を喪失し, 非現実的・幻想的“airy”な空間において維持される自己中心的な価値世界の自己愛的存在者となっている。さらに“dainty of his worth”という表現が暗示する Achilles の状態とは, 換言すれば, 自己の身体でリビドーを充足させる「自体愛 (auto-erotism)」(食欲に関わる“dainty”という言葉を考慮に入れてより正確に言えば口唇期的自体愛) の状態である(cf. “Three Essays” 97-99)。二幕三場でギリシアの総指揮官 Agamemnon が自分との面会を拒否した Achilles を批判する“the savage strangeness” (2.3.128)という言葉は, Achilles の外部世界に対する無関心の態度には同時にサディズム“savage”——それは肛門期的特徴でもある (cf. “Three Essays” 117, 158: “Transformations” 295: Laplanche and Pontalis 35-36) ——が含まれていることを窺わせる。Ulysses も “[Achilles] never suffers matter of the world / Enter his thoughts” (2.3.187-88)と語ることで, Achilles が自己の誇大化に寄与しない外部世界を排除—排出—排泄していることを指摘する。

このようにリビドーを内向させ, 外部世界—共同体を排除したところに成立する Achilles の自己意識とは, Agamemnon が批判的に指摘する —— “His humorous predominance”(2.3.131) —— ように, 「全能感」である。この全能感は経験によって強化され得る。例えば Ulysses は次のように言う。“Things small as nothing, for request’s sake only, / He makes important.” (2.3.170-71; cf. 185-200, 228)。また Hector との一騎打ちを拒否しようとする Achilles

について Ulysses は次のようにも言っている。

He doth rely on none,
But carries on the stream of his dispose
Without observance or respect of any,
In will peculiar and in self-admission. (2.3.164-67)

全能感から Achilles は外部の「意志」ではなく自らの「意志」にのみ従い、その結果として公的規範によって統御されるべき共同体に私的規則を持ち込むのである。外部世界に対する認識を欠落させ、自己の全能性を意識することで共同体内部に私的・内的世界を構築する Achilles を Ulysses は誇大妄想——“possess'd he is with greatness” (2.3.171)——と捉えている。そして Achilles の内部では幻想に過ぎない価値“Imagin'd worth” (2.3.173)が自己破壊的なまでに支配的となっていると Ulysses は指弾する(2.3.173-77)。

こうした Achilles のナルシシズムはギリシア共同体と対立する。それは Achilles が戦争において不可欠の戦力として見做されている(2.3.133-34)からであるが、しかしそれだけではない。彼のナルシシズムを他の人物が「模倣」“imitation” (1.3.185)することでギリシア陣営の共同体的秩序が破壊されているからである。ギリシアの老将 Nestor は次のように言う。“And in the imitation of these twain [Achilles and Patroclus], / Who, as Ulysses says, opinion crowns / With an imperial voice, many are infect.”(1.3.185-87) 一幕三場の有名な演説において、Ulysses はギリシア陣営内部では「序列」“degree”が保守されず「羨望的競争心」“emulation” (1.3.134)が蔓延していると主張する(1.3.75-137)。つまり共同体における秩序が本来保証すべき序列間格差=差異はもはや安定・固定したものではなく、今ではむしろ価値を算出・獲得するための場となり、その差異は価値=利益として“emulation”により消尽されていく。こうしてギリシア共同体の階層空間は利益追求のための資本主義的競争の場へと変貌を遂げる。“emulation”とは模倣への欲望である。そして Ulysses によれば、ギリシア軍上層部の「模倣」“imitation” (1.3.150)を多分に歪曲を織り交ぜながら Patroclus に行わせる(1.3.149-84) Achilles のナルシシズムこそが序列=差異を

破壊する模倣の連鎖の元凶ということになる。結果的にギリシア共同体はアトミスティックな状況に陥り、各人は共同体の共通の目的・利益に統合されることなくそれぞれの私的利益獲得を目指し、戦争には向かわない——換言すれば、それはまるで「部分欲動 (partial drives)」が中心を持たずそれぞれ自体愛的に目標・充足を求めるようなものである (cf. “Libido Theory” 256: “Three Essays” 109-11, 127: Laplanche and Pontalis 74-75)。それが共同体を内側から侵蝕しているというのが Ulysses の主張である。

このようにギリシア陣営では各人のリビドーは戦争を導く攻撃的エネルギーに転換・昇華されるのではなく、ナルシズム的な自我リビドーとして自分自身とその私利私欲に向かう傾向にある。Ulysses によれば、この問題の核にあるものこそ Achilles のナルシズムなのである。それ故に三幕三場で Achilles は Ulysses を媒介にして共同体の論理に直面させられることになる。そこではまず Ulysses は個人に対して共同体を優先させる立場に立ち、Achilles のナルシズム的自己を相対化する目的で他人—共同体と共同体的価値という二つの視点を提示する。また、続けて Ulysses は Achilles の性愛を共同体の視座から問題化することになる。

例えば二幕三場で Achilles に面会を拒絶された Agamemnon は次のように Patroclus に語る。“[A]ll his virtues, / Not virtuously on his own part beheld, / Do in our eyes begin to lose their gloss.” (2.3.119-21) ここでは「美德」「virtues」とはまず「見られる」「beheld」ものとしてある、つまり「見られる」ことで初めて「美德」として現象するという形式で「美德」と「視線」の関係が提示されている。この視線の所有者とは「我々の目」「our eyes」である。より具体的に言えば、それはギリシア共同体の他の構成員であり、この構成員による認知・承認が「美德」という「価値」をもたらす。一方、ナルシズムに陥った Achilles は自己言及的にそして自己反復的に自らの価値を作り出そうとするが、そうして作り出されたかに見える価値は共同体の中では無根拠なものと思倣される。Agamemnon は次のように語ることで、そのことを明らかにしている。“He that is proud eats up himself . . . and whatever praises itself, but in the deed, devours the deed in the praise.” (2.3.156-59) つまり共同体が

認知する「行為」“the deed”が価値をもたらす。その場合、共同体とその構成員はAchillesのナルシズム的自己に対する「他人」として、彼の自閉的自己世界の外部を構成している。AgamemnonはAchillesのナルシズムに抗して共同体の論理を主張しているのである。

この共同体の論理にAchillesが直面させられることになるのが三幕三場である。価値を与える視線という視線の力学を逆用して、Ulyssesはギリシアの將軍達にAchillesに対して“negligent and loose regard” (3.3.41)や“unplausible eyes” (3.3.43)を向けるよう求める。そこで目論まれているのは、視線に否定的意味合い(“negligent,” “loose,” “unplausible”)を込めることによってAchillesに対して与えられる認知・承認の質を悪化させ、その結果共同体における彼の価値の低下を印象付けることである。視線の変化は瞬刻間にAchillesの気付くところとなる。彼は次のように問う。“What, am I poor of late?” (3.3.74) AgamemnonはかつてAchillesの自己評価を問題にする際にAchillesの「価格」“his price” (2.3.135)という言葉を使っていたが、今ではまさしくその「価格」が下落してしまったとAchillesは感じるのである。そのときAchillesが想起するのは、自己に対する認知・承認の質を決定するのは「他人の目」“the eyes of others” (3.3.77)であるということ(3.3.76-78), 「名誉」“honour” (3.3.81)は人に内在的なものではなく、その人の外側“without him” (3.3.82)にあって共同体がその価値を認めた「もの」を所有することによって得られるものであるということ(3.3.80-82), そしてそうした「もの」は多分に「偶然」“accident” (3.3.83)の産物であり、それ故それに依拠する「愛」“The love” (3.3.85)と同様極めて不安定(cf. “slippery” (3.3.84, 85))なものであるということ(3.3.83-87)である。このようにAchillesに対する他人の認知・承認の否定的変容は彼から今まで享受してきた他人の「愛」を奪うことで、彼の自己愛を貧困化させる。彼の全能感は動揺せずにはいない。否応無く自己の価値を決定付ける外部世界の存在がナルシズムによってもたらされたAchillesの自閉的自己に亀裂を走らせる。

I do enjoy

At ample point all that I did possess,
 Save these men's looks; who do, methinks, find out
 Something not worth in me such rich beholding
 As they have often given. (3.3.88-92)

共同体の他人の視線“these men's looks”は Achilles に対し自分の思うようにならない外部世界の存在を突き付ける。そして Achilles に価値を与えていた彼らの視線“rich beholding”は今ではその価値付けを止めてしまう。こうして Achilles は価値決定の主体は認知・承認を行う共同体であって自分ではないことを意識するようになる。

Achilles が Ulysses に会うのはこうした自覚を促されたときである。かつて Agamemnon は Achilles の慢心を批判して“pride is his own glass” (2.3.156-57)と述べることで、Achilles がまさしくナルシズム的に自分で自分を映す「鏡」“glass”となっていることを指摘していた。しかし既に述べたように、「価値」とはナルシズムの規則に従って自己言及的に作り出されるものではない。「価値」とは他人の目—鏡に映し出された自分自身の像—痕跡である。ここまでくれば、ここで Karl Marx の次の有名な言葉を引用してみることも無意味ではあるまい。「価値形態 (value-form)」に関する議論の中で商品の「価値」を論じる際に、Marx は「鏡」の比喩を持ち出すからである。Marx は次のように書いている。“In a certain sense, a man is in the same situation as a commodity. As he neither enters into the world in possession of a mirror, nor as a Fichtean philosopher who can say ‘I am I,’ a man first sees and recognizes himself in another man.” (144) 人は「他人」“another man”という鏡に映った自分自身の像—痕跡を通じて自分の存在を確認・再認する (cf. Jacques Lacan)。換言すれば、「他人」を「価値鏡」“a mirror for the value” (Marx 144)とすることによって自分の価値を実現・認識する。そして Ulysses が Achilles を導くのは、自己言及・自己反映から自己の像を与える鏡としての他人=共同体へ、という方向である。

まず Ulysses が述べるのは、才能にしろ所有物にしろそれを持っていると主張出来るのは、あるいはそもそもそれを意識出来るのは「反射・反映」“reflection” (3.3.99) によってのみであるということである(3.3.96-99)。Ulysses は “reflection” に具体的イメージを与える。“[H]is virtues shining upon others / Heat them, and they retort that heat again / To the first giver.” (3.3.100-02) 「美德」“virtues” は「他人」“others” (3.3.100) に働きかけ (熱を「与える」)、他人がそれに対して一定の反応を返す (同じ熱を「与え返す」) ときにのみ価値としての美德となる。換言すれば、個人による「贈与」は他人との「交換」を前提にしなければ無意味であり、この他人との交換を通じて初めて個人の価値は実現される。このように “reflection” という概念は個人を他人との相互交換という関係性の中に置く。そして他人との交換的關係性の中でのみ個人は価値存在となるという認識が Ulysses の議論を支えている。

Ulysses の指摘を Achilles は自明視する。そして個人の「美貌」“The beauty” (3.3.103) は「他人の目」“other’s eyes” (3.3.105) を通じて初めて自覚されると言う Achilles は、確かに個人の価値をあくまで他人との関係の派生物と見做す立場に立ってはいらぬ。このように Achilles は Ulysses の議論を一応引き継いでいるが、以下に続く発言では Ulysses の議論の中核にある「価値」の問題は看過されていく。例えば Achilles は目は自分で自分を見ることが出来ず、他人の目を鏡とすることによって初めて自分の姿を確認することが出来ると述べる。

[N]or doth the eye itself,
That most pure spirit of sense, behold itself,
Not going from itself; but eye to eye oppos’d
Salutes each other with each other’s form. (3.3.105-08)

そして Achilles の結論とは鏡によらずして眼・視線・視覚・視力 “speculation” (3.3.109) は自分で自分自身を直接的に見たり把握したりすることは出来ないということである。つまり Achilles が当初 “The beauty” の存在形態を語ることの中には、価値と他人の存在との相即不可分の関係が暗示されていたが、彼のその後の議論は価値の問題を欠落させた視覚 (cf. “sense”) の問題に還元されてしま

うのである。

Achillesが常識化 “not strange at all” (3.3.111) —— Ulyssesは “familiar” (3.3.113) と言う —— した議論に Ulysses は価値の次元を回復する。つまり個人と他人との関係に価値の問題を介在させることで、Ulysses は個人の価値が他人との関係から派生するものであることを再び確認する。“[N]o man is the lord of anything, / Though in and of him there be much consisting, / Till he communicate his parts to others.” (3.3.115-17) 「他人」“others” に自分の「資質」“parts” を「伝える」“communicate” ことによって初めて、人は所有の対象物として認知・承認され得る（つまり価値を有する）「何か」“anything” を持つことが出来る。この時「コミュニケーション」 —— “communicate” という言葉 —— は他人の存在を条件付けると同時に価値の次元を導入する概念として機能する。価値とは独我論的 (cf. “in and of him”) に構成されるものではなく、間主観的に形成されるものであるというわけである。

さらに Ulysses は次のように話を続ける。

Nor doth he of himself know them [his parts] for aught,
Till he behold them form'd in the applause
Where th'are extended; who, like an arch, reverb'rate
The voice again; or, like a gate of steel
Fronting the sun, receives and renders back
His figure and his heat. (3.3.118-23)

個人の価値とは、「拍手喝采」“the applause” という言葉に端的に示されるように、他人によって「行為遂行的 (performative)」に「形成される」“form'd” のであり、それ故それは他人の「発話行為 (speech act)」(cf. “reverb'rate / The voice”) に依存せざるを得ない。またこの発言においても他人との「交換」(cf. “receives and renders back”) の原理が確認されている。ギリシア共同体の利益を代表する Ulysses にとって「交換」と「コミュニケーション」とは同義的に機能する概念であり、Achilles の反共同体的なナルシズムに対する処方箋 (cf. “medicinable” (3.3.44)) として他人＝共同体と共同体的価値とを導入する

重要な契機となっている。

Achilles の価値低下を「事実確認的 (constative)」に暗示するようなされた Ulysses のこうした発言自体、実は行為遂行的に Achilles から価値を剥奪する一つの発話行為として目論まれたものである。そして Ulysses は Achilles が失った価値を今 Ajax が獲得・回収しつつあることを指摘する(3.3.123-41)。Achilles 自身、他人の発話行為や視線——“Good word nor look” (3.3.144)——によって自分がもはや価値付けられなくなったことに気付いている。今の Achilles に来るのは自分の(価値ある過去の)行為は忘却されたのかと Ulysses に尋ねることだけである。“What, are my deeds forgot?” (3.3.144) その問いに対して Ulysses が提示するのが「時」“Time” (3.3.145) の問題である。

今までの発言で Ulysses が明確にしてきたのが価値形成の共時的メカニズムであるとする、[時]の議論を通じて彼が展開するのは価値形成の通時的メカニズムであると言える。過去の価値ある行為“good deeds past” (3.3.148)といえど所詮は貪り食われ、忘却されるものとして捉える Ulysses にとって(3.3.148-50), 行為とは詰まるところ消費の対象に他ならない。それ故 Ulysses は次のように言う。“Perseverance, dear my lord, / Keeps honour bright: to have done is to hang / Quite out of fashion. . . .” (3.3.150-52) 現在と過去が前半・後半で対比されるこの発言において、Ulysses は「名誉」“honour”を維持するものとして「忍耐」“Perseverance”を強調する。つまり現在に固執することこそが名誉=価値をその現在において不断に更新させるのである。

さらに Ulysses は道とレースのイメージを用いて「時」を空間化・直線化し、かつ「時」を価値(=利益)獲得のための資本主義的競争の場として提示するが(3.3.153-63), その際においても重視されているのは「時」の先端としての現在の意義である。彼は次のように言う。“Then what they do in present, / Though less than yours in past, must o'er-top yours.” (3.3.163-64) 現在と過去を再度対比させるこの言葉が明らかにしているように、現在の行為が過去の行為と比較して優る(つまりより価値がある)のは、それに実質・内容が伴うからではなく、ひとえにそれが「現在」なされるからである。価値=「美德」“virtue” (3.3.169) の根拠は過去にはないのである (3.3.169-70)。現在を好む「時」は

“fashionable” (3.3.165) であり、あらゆるものが「時」の「臣下」“subjects” (3.3.173) としてそれに従属する(3.3.171-74)。

Ulysses は価値が継起する現在においてのみ形成・維持されるという論点を執拗に繰り返す。“One touch of nature makes the whole world kin— / That all with one consent praise new-born gauds, / Though they are made and moulded of things past. . . .” (3.3.175-77) ここでは物象化された「時」がほとんど資本主義的とさえ言える観点から考察されている。つまり現在の価値とは過去との差異のことである。こうして現在は過去から不断に差異化される。価値はこの差異化のプロセスを通じて形成され、この価値への欲望が「時」を現在／過去という差異化のプロセスとして実現する。価値への欲望は差異への欲望であり、それが現在への欲望に繋がる。そして現在への欲望は現前性への欲望でもある。“The present eye praises the present object.” (3.3.180)

従って、Achilles にとって戦場から撤退しテントに引き籠ることが自らを生きたまま「埋葬する」“entomb” (3.3.186) ことに等しいと Ulysses が考えるとき、Ulysses は自分自身の現在性と現前性とを放棄した Achilles の価値の次元における死を問題にしているのであり、その意味で Ulysses の言う箱詰めにされた Achilles の名声 (cf. “case thy reputation” (3.3.187)) とは価値を剥奪された名声の形骸に過ぎない。そして Achilles のこの価値の低下が Ajax の価値の相対的上昇の原因であると Ulysses は付け加えるのである(3.3.181-84) —— 現実には、その上昇は Ulysses が戦略的かつ恣意的に作り出したものであるにもかかわらず。

Ulysses の諫言に対し Achilles は自分の「隠遁」“privacy” (3.3.190) には強い理由があると反論する(3.3.190-91)。しかし Ulysses は Achilles の隠遁に反対する “’gainst your privacy” (3.3.191) 理由のほうがより重要であると反駁し、その上彼の隠遁の内実を暴露する。“’Tis known, Achilles, that you are in love / With one of Priam’s daughters.” (3.3.193-94) その内実とは Achilles の女性関係であり、その意味で彼の性的欲望と直結している。今回の Ulysses の発言の核にあるのは性愛の禁止である。実はここから Ulysses の議論は第二段階に入る。既にみたように、彼の議論の第一段階は Achilles のナルシズムに対して他人－共同体と共同体的価値の論理を突き付けることで、彼のナルシズム的自己を脱

中心化することが目的とされた。論を先取りして言えば、第二段階では Achilles が欲望する性の享楽を抑圧・禁止する共同体の審級が、彼の自我に対する「超自我」として提示される。

自らの性愛の秘密が知られていたことに対する驚きを隠さない Achilles に向かって、Ulysses はこの特別な知の主体の正体を次のように明かす。

The providence that's in a watchful state
Knows almost every grain of Pluto's gold,
Finds bottom in th'uncomprehensive deep,
Keeps place with thought, and (almost like the gods)
Do thoughts unveil in their dumb cradles. (3.3.195-99)

“providence”や“like the gods”と神聖化・神格化されたこの特別な知の主体とは、監視・観察“a watchful state”と暴露“unveil”とを行う審級のことであり、その監視・観察・暴露の対象は個人の内面 (cf. “thought(s)”) である。そして Ulysses は「国家の魂」“the soul of state” (3.3.201) にこの審級が神秘的 (cf. “a mystery” (3.3.200)) なかたちで存在すると言う (3.3.200-03)。

しかしここで注目すべきなのは、神にも比されるこの審級の神聖な機能 “an operation more divine” (3.3.202) が現実には性的で猥褻なものに対する観察・監視であるということである。“All the commerce that you have had with Troy / As perfectly is ours as yours, my lord.” (3.3.204-05) さらに Ulysses によって体现されているこの審級は、Achilles が Polyxena に向ける対象リビドーとその満足を制限し、拒否しようとする。“And better would it fit Achilles much / To throw down Hector than Polyxena” (3.3.206-07) ここに窺われるのは検閲者による性愛の禁止である。同時に Achilles は Polyxena への恋着に向けられたリビドーを戦闘行為を導く攻撃的エネルギーに転換・昇華することを求められている。“throw down” という言葉には戦闘的意味と同時に性的意味がある。そして戦争の論理の優位のもと性愛は抑圧・禁止される。

また Ulysses は Achilles のナルシズムもそれが自己に対して抑圧的に働く自尊心として機能する限りにおいてそれを利用しようとする。

But it must grieve young Pyrrhus now at home,
 When Fame shall in our islands sound her trump
 And all the Greekish girls shall tripping sing
 'Great Hector's sister did Achilles win,
 But our great Ajax bravely beat down him.' (3.3.208-12)

Achillesの去勢不安を煽るかのように、ここには女性に屈服・服従したAchillesの姿が様々な次元から示されている。

以上にみてきたように、Achillesが認識を迫られるのは、彼の自我を観察・監視し、性愛に対する検閲を行いながら、その性的願望の充足・満足に厳しい制限を課し、結果的にはそれを禁止する審級、同時に彼の性愛を昇華させることで、性的欲望の対象と目標を根本的に変化させ、彼のリビドーを英雄的戦争行為という共同体が価値を認める事業の実現において充足させようとする審級である。つまり Achillesの放縦で猥褻な「自我」はギリシア共同体の「超自我」の抑圧・検閲を受けるのである(cf. “On Narcissism” 87, 89-90, 95-97: Laplanche and Pontalis 435-38)。² これもまたAchillesのナルシズムがもたらした自己(自我)中心性を動揺させる。

ギリシア共同体の「超自我」が指示／支持している理想は「名誉」(cf. “Fame” (3.3.209))である。それはAchillesに対し「名誉」を規範——自我に対する「自我理想(ego-ideal)」——として承認・内面化し、その要求に服従することを求めている(cf. “On Narcissism” 95, 96-97: Laplanche and Pontalis 144-45)。換言すれば、Achillesはギリシア共同体において特権的に理想化される兵士＝英雄としての名誉・名声にリビドーを割り当てなければならないのである。³ これが共同体が考えるナルシズムと性愛のあるべき「運命(vicissitudes)」である。実際 Ulyssesとの対談直後、Achillesは Patroclusと次のような会話を交わす。

Achilles. Shall Ajax fight with Hector?
Patroclus. Ay, and perhaps receive much honour by him.
Achilles. I see my reputation is at stake:
 My fame is shrewdly gor'd. (3.3.224-27)

Achilles は自分の名声・名誉の危機を悟ることになる。

共同体の「超自我」がもたらす理想形成は Achilles の自我の要求を高め、その抑圧を強化する。四幕五場においてトロイの Hector と挑発的な対面を行った Achilles が彼との対決を一旦は決意する(4.5.265-69)のもそうした事情による。しかし Polyxena の存在が再びそれを阻止する。Achilles は次のように言う。

My sweet Patroclus, I am thwarted quite
From my great purpose in tomorrow's battle.
Here is a letter from Queen Hecuba,
A token from her daughter, my fair love,
Both taxing me, and gaging me to keep
An oath that I have sworn. I will not break it.
Fall, Greeks: fail, fame: honour, or go or stay;
My major vow lies here, this I'll obey. (5.1.36-43)

抑圧された性愛は回帰し再び戦争と対立する。Ulysses の策は結局成功せず、Achilles を戦争に向かわせることは出来ない。

皮肉にも Achilles を最終的に戦争に向かわせるのは「愛人」“My sweet Patroclus” の戦死と部下 Myrmidon 達の屈辱的な負傷である。Patroclus の死により Achilles のリビドーは充足の現実的対象を失うことで初めて、抑圧を引き起こさずに戦闘に充当される攻撃的エネルギーへと転換・昇華されるのである。しかし注目すべきは、性愛から戦争へというこの劇全体を貫くりビドー経済自体はいずれの場合でも同様に機能しており、最終的には実現されるということである。

註

- ¹ 本論は予定されている *Troilus and Cressida* 論の第二部を成すものである。
- ² しかし、この「超自我」は猥褻でもある。例えば Ulysses は一方で Cressida を嫌悪しながらも、彼女に対する好奇心を失うことはない。またギリシアの将軍 Agamemnon とその弟 Menelaus については Thersites が次のように語っている。

Here's Agamemnon: an honest fellow enough, and one that loves quails, but he has not so much brain as ear-wax; and the goodly transformation of Jupiter there, his brother the bull, the primitive statute and oblique memorial of cuckolds, a thrifty shoeing-horn in a chain at his brother's leg. (5.1.50-56)

- ³ 兵士-英雄としての「名誉」という理想を頂くギリシア共同体はあくまで男性-共同体で、そこからは女性は徹底的に排斥される。

引用文献

- Freud, Sigmund. "The Libido Theory." *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*. Ed. and trans. James Strachey. Vol. 18. 1955. London: Hogarth, 1981. 255-59.
- . "On Narcissism: An Introduction" *On Metapsychology: The Theory of Psychoanalysis*. Trans. James Strachey. Ed. Angela Richards. The Penguin Freud Library, vol. 2. 1984. Harmondsworth: Penguin, 1991. 65-97.
- . *On Sexuality*. Trans. James Strachey. Ed. Angela Richards. The Penguin Freud Library, vol. 7. 1977. Harmondsworth: Penguin, 1991.
- . "On Transformations of Instinct as Exemplified in Anal Erotism." *On Sexuality*. 295-302.
- . "Three Essays on the Theory of Sexuality." *On Sexuality*. 39-169.
- Lacan, Jacques. "The Mirror Stage as Formative of the Function of the I." *Écrits: A Selection*. Trans. Alan Sheridan. London: Routledge, 1977. 1-7.
- Laplanche, J., and J.-B. Pontalis. *The Language of Psycho-Analysis*. Introd. Daniel Lagache. Trans. Donald Nicholson-Smith. The International Psychoanalytical Library. London: Hogarth, 1973.
- Marx, Karl. *Capital: A Critique of Political Economy*. Introd. Ernest Mandel. Trans. Ben Fowkes. Vol. 1. 1976. Harmondsworth: Penguin, 1990. 3 vols.
- Shakespeare, William. *Troilus and Cressida*. Ed. Kenneth Palmer. The Arden Shakespeare. 1982. London: Routledge, 1994.